



時代に学ぶ

富山県小学校長会

会長 山瀬 敬

国の教育改革は、短期間のうちに次々と答申が出され、具体化に向けて大きく動き始めている。いま、私たちが最も考え、実行しなくてはならないことは、学校、保護者、地域がしっかりスクラムを組んで連携する小さな自前の教育改革の積み重ねではないだろうか。

私が勤める学校は、来年4月から3つの学校が統合し、新しい学校となる。新しい学校の創立に関われることは、身の引き締まる思いであり、大きな喜びを感じる。

1年前から、統合に関する様々な課題について3校の教職員で協議を重ねてきた。生活のきまり、教育課程、学校行事といったことはもとより、学校のあるべき姿、経営方針、何を目指し授業するかなど、できる限りその本質に迫るよう掘り下げて議論をしてきた。その取組を通して思うことが3つある。

- ・何より、教育に携わってきた諸先輩は、確固たる教育信念のもと、誠実に「当たり前」の事をしっかりできる」ようにやってきたのだと強く思う。これまでの富山の教育は決して間違っていなかった。変えてはいけないことがある。しかし、時代に対応し、変わるべきこともある。
- ・小さな改革の積み重ねには、一にも二にも校長の覚悟と努力が必要である。校長が変われば、教員も変わる。教員が変われば、子供も変わる。学校の姿勢を、校長が先頭に立ってしっかり創り上げ、それを保護者や地域、さらに未来の保護者に向かってしっかりと宣言し実行することが、学校経営に必要な時代になった。
- ・本来、教育は時代、そして社会や経済、思想と密接な関係にあるはずである。しかし、私たちはその関係に疎いのではないか。もっと知る必要があり、もっともっとそこから学ぶ必要がある。

例えば、私たちの生活と切り離すことができない「インフラ（※）」。

高度成長期に作られた橋や道路などのインフラが次々と補修時期になっており、その管理が非常に難しい状況にある。インフラのトラブルが起きるのは、「隙間」だという。つまり、みんなの目、注意が行き届かない所。あるシステムの中で、少しずれている部分、不連続な場所が弱い。自然がそのような弱いところを突いたとき、事故が起こるといふ。

ある科学季刊誌の中で土木工学の専門家藤野陽三さん（横浜国立大学上席特別教授）がインタビューに答えて次のように述べている。

『既に未来のインフラに必要なものが研究されている。インフラ自体が自身の異常を感じる「フィードバック機能」を持つ、応力発光体という素材が実用化間近だという。つまり、構造物に負荷がかかって亀裂ができる前に、負荷の大きい場所が色が変わるといふ仕組みである。』

なんということか、インフラの世界は未来に向かって動いているのである。私たちが教育における社会や人との関わりのずれや摩擦の異常を感じ、それを補正していこうとする審美眼をもっと磨き、教育の機能や役割を構築する必要がある。

教育は国にとっては百年の大計であり、親にとっては一大事業であり、教師にとっての日常である。子供たちの将来を創造する礎を築く教員として、時代の流れを感じるとともに、理念と信念をしっかりと抱き未来を育むという誇りと自信、そして責任をもって励んでいきたい。

※インフラ＝インフラストラクチャーの略：「見えない」「下部構造」「社会に直接利益は生まないが、それがあって皆が生活でき、富を生めるもの」